

光潮会報

平成 21 年 第 61 号



希望の光燦として
今ぞ明け行く新日本
周防の灘のあら潮に
鍛え磨かん身と心
輝け光あげよその名
吾が学び舎に栄あれ



高き理想の峰に咲く
真理求めん朝な夕
蜚雪窓に文を読み
千古に不磨の想を練る
輝け光あげよその名
吾が学び舎に栄あれ



広く文化の粹をとり
まもる正義の自由人
四海の友と手を取りて
ゆるがぬ平和打ち立てん
輝け光あげよその名
吾が学び舎に栄あれ



山口県立光高等学校

光潮同窓会



も く じ

もつと心膨らむコトへ	3
同窓会会員の皆さんへお願い	4
「変」	4
あたたかい心を大切に	5
同窓生の期待と母校愛	6

支部だより

(関東支部) 熱き思いを継承して	7
(関西支部) 逢坂の関址	8

特集「光龍一八会」

私たちの誇りは「光龍一八会」	10
―同窓会活性化に向けて―	

同窓会役員から「一筆啓上」―同窓会への思いを込めて

隗より始めよ	12
同窓会に期待すること	13
光潮同窓会の意義	13
光高等学校	14
心のブレーキ	14
これからの光高校(光高校生)に期待すること	15
ふるさと「光」を感じたとき	16
近くて遠い存在	17
母校の繁栄を願って	18
「光潮同窓会に寄せて」	18
北川 宜孝	18
佐々木 孝	18
森戸 芳高	17
芳岡 統史	16
田中 謙史	15
松尾 尚慈	14
木村 幸子	14
酒井 隆行	13
守田 信義	13
守田 昭枝	12
作間 源治	10
中 靖生	7
守 田 清	8
唐 松 良生	6
磯部 登志恵	5
小川 善昭	4
長岡 幹夫	4
加藤 正暢	3

母校だより

部活動の足跡(平成二十年二月～平成二十年十二月)	19
平成二十年度光潮同窓会活動報告・光高校歌	23
同窓会運営組織図・光潮同窓会役員名簿	24

編集後記	25
------	----



もつところ膨らむコトへ

会長 加藤 正暢 (昭和30年卒)

卒業の諸君、おめでとう。今時より光潮同窓会の同志になる。歓迎至極だ。

光潮同窓会は、同じ光高卒という「事実」によって結ばれた緩かな紐帯組織。だから平素はその存在は意

識外のことだろう。

ただ時に、自己の来し方行く末に思いを致すような時、ふっと青春の学園生活を想起することはある。また予期せぬ同窓同志の出会いもある。さらに古巣の学園が社会的に注目される事態となり、自分もそれに連なる者として善悪超えて自己喚起することもある。

いずれにしろ同窓会は、同期会と違い、影の如きもの、あってよし、なくてよし、でもあってほしいものである。当然会員個々にとって切実さを持つ対象ではない。

であるなら、ガヤガヤと向き合いながら、前向きに関わろうという意思と感性を持つ者が集い、でき得る事からトコトコと楽しくやっていくに如くはない。これでいく。

何をするか。会員相互の和の増



進、在校生への力付け、学校への協力、以上三点だ。

多くの同窓生の存在は大きい。いまさら光潮同窓会の火を消すわけにはいかない。

帰りなんいざ青春の地へ、人心将に荒れなんとす。何ぞ帰らざる。

同窓会会員の皆さんへお願い

副会長 長岡 幹夫 (昭和38年卒)



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。これで我々と同じ光潮同窓会の会員となりましたので、今後とも宜しくお願いいたします。光潮同窓会も昨年の総会で会則の改定を行い、役員体制をスリム化して同窓会の活性化に向けて進めているところです。皆さんご承知とは思いますが、本会の目的は会員の親睦を図ることと母校の発展に寄与することです。主な行事としては、年一回の総会、会報の発行、生徒会に対する

援助などがあげられます。私の感じるところ、会員の皆さんの母校愛というか同窓会への関心が薄いように思えてなりません。昨年、関東支部の総会に参加させてもらいましたが、会員数に対して参加者が非常に多いのにびっくりしました。理由は郷土愛、母校愛が根源にあったのです。都会で生活をすれば古里が懐かしく、また、日頃会えない友に会える楽しみが参加率にも影響しているのではないのでしょうか。関西支部も同様な事がいえると思います。そこで本部役員の方へお願いです。同窓会への関心を少し改めていただきたいと思います。特に評議員の方、評議員会および総会などの行事に積極的な参加を、重ねてお願いいたします。

「変」

副会長 小川 善昭 (昭和45年卒)



ご卒業おめでとう。いよいよ同窓会への仲間入りですね。昨年の世相を現す字は 清水寺貫主 森 清範さんが「変」という字を書かれました。「日米の政治に変化」「世界的な金融情勢の変動」「生活に不安を覚えた一年」また「明るい未来に期待をこめて」日本人のノーベル賞受賞など、様々な分野で時代のいい変化を感じ、いい意味でも悪い意味でも変化の多い一年であつたが、明るい未来に向かって、

世の中や自分達が新たに変わっていく年であり、これから変わっていききたいという気持ちを込める意見が多かつたのである。

光潮同窓会も昨年改革に向けて第一歩を踏み出したといえる。

同窓会の活性化は、同窓生の「母校に対するご恩返し」の気持ちや、「後輩の同窓生仲間のために頑張りたい」といった「ボランティア精神」によつて支えられるものである。

同窓会活動は、本来母校に対する純粹なボランティア精神の気持ちに根ざしたものであるが、出来るだけ多くの同窓会員の支持や理解が得られるものにすべきである。母校のためにみんなで参画しよう。

あたたかい心を大切に

副会長 磯部 登志恵 (昭和53年卒)



懐かしい高校時代。あれから何年経つのだろうか。恥ずかしながら、幾つになっても気持ちだけはいつも若々しいつもりでいる。

ありがたいことに、私たちの学年は非常に繋がりが深く、今でも公私共に楽しい関係が続いている。お互いの老いを素直に受け入れながら付き合える仲間は、本当にありがたい存在だ。ストレス社会の中で、気を使わないホッとする瞬間なのかもしれない。

私は縁があって、光潮同窓会の副

会長という役を頂いている。一年に一回開催される光潮同窓会等、老若男女が同窓生というだけで関われることは、本当に素晴らしいことである。今では、世代を超えた素敵な出会いに感謝し、「同窓会、なんとかせんといけん」、そんな熱い気持ち

が沸々とわき起こってきた。

いつの時代でも、母校は心のあるさとであり大切にしたい。そしてどんな些細なことでも、力になりたいと思っている。殺伐とした時代だからこそ、光潮同窓会の存在は、人としての道を先輩から学べ、あたたかい心を大切にすることを再確認できる場所となるのではないだろうか。これからも、光高を卒業されたみなさんと一緒に、楽しく盛り上げていきたい。そのための協力を、心から願う。



同窓生の期待と母校愛

校 長 唐 松 良 生



昨年四月に着任して以来、多くの光潮同窓生の方々に御支援を賜りました。ここに、その一端を御紹介させていただきます。

昨年七月七日に行った「卒業生講話」(創立70周年を記念して平成18年度から実施しています)には、松下重恵氏(第6期 昭和29年卒)をお招きし、『世界に一つだけの花』という演題でお話をいただきました。この個性をしっかりと見極めることが大切である」と熱く語られ、その言葉

は、生徒たちに力強いエールとして刻み込まれたと確信しております。示唆に富む講演内容に私は感服いたしました。東京にお住まいでありながら、旅費等の経費は全て自費で、さらに、謝礼は一切お受け取りになりませんでした。「同窓生として、何か母校の役に立ちたい」というお考えは、講師を御依頼したときから終始一貫しておられました。

時を同じくして、七月三日には高村光子氏(第14期 昭和37年卒)から、樹齢一三〇〇年のしだれ桜を描かれた一〇〇号の絵画『蒼い桜』を寄贈していただきました。岐阜県で開催された絵画展で入選された大作を、「ぜひ、母校に飾ってほしい」と申し出られたのです。生徒が登校

してすぐに目にする場所がよいと思い、昇降口に展示させていただきました。毎日、登校してきた後輩たちを堂々とした姿で出迎えてくれます。

お二人に共通することは、「母校の後輩たちに何かを伝えたい」と、素朴なお気持ちから行動を起こされたということです。後輩たちへの心遣いと母校への愛情の深さを感じずにはられません。

また、十月には関東支部総会に出席し、十一月には関西支部総会に出席いたしました。どちらの総会でも、初対面の私を気持ちよく歓待してくださいました。後の懇親会では「次に甲子園へ出場するのはいいでしょうか。期待しています」と、多くの方々から尋ねられました。酒席だったことも手伝って「近いうちに、必ず御期待に応えます」と豪語する私に、「頑張ってください」と満面に笑みを浮かべながら、手を強く握りしめてくださったことが印象に残っています。

このように、光潮同窓生の皆様の

本校への御厚情を強く感じることでばかりでございます。皆様方の御期待に応えられますよう、教職員、在校生全員で精進してまいりますので、今後とも温かく見守っていただきますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓生の皆様方のますますの御健勝と光潮同窓会のさらなる御発展をお祈りいたします。御挨拶といたします。



2回目の甲子園～堂々の入場行進(平成6年夏)



支部だより

熱き思いを継承して・・・

関東支部会長 中原 靖生 (昭和34年卒)

皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

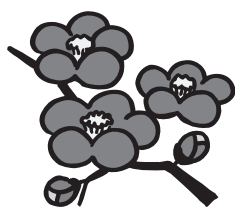
昨年、開催された関東支部の総会で、西崎好一氏の後任として会長に就任しました。西崎氏は関東支部を創立し、爾来十六年間会長を務められました。その間のご苦勞は察して余りあるものがあります。私より一〇歳年上の氏が献身的に同会の発展に寄与されたお姿を見ると、断れず会長職をお引き受けした次第です。

現在、関東支部の登録会員は約九〇〇名、年会費納付者二四三名、総会、懇親会には毎年一〇〇名以上が集まります。光潮同窓会会長、校長、市長などゲストをお迎えして、母校や光市の現況を聞き、世代間の交流、ふるさと光への望郷、趣味の輪など、同じ学び舎から巣立った仲

間が楽しく集う同窓会に発展してきました。今後は更に多くの同窓生、特に若い世代の参加を学年幹事の協力を得て促していききたいと思っています。

在校生の皆さんは勉学に励むと同時に、魅力ある人間になるための研鑽をしてほしいと思います。物質的に豊かになった日本人に欠けているものは心の豊かさです。皆さんを今まで育ててくれた人達に感謝し、高い志と清き心をもち正々堂々と自らの人生を歩んでほしいと願うものです。

新執行部の皆さんとともに西崎氏の熱き思いを継承し、本部との連携を深め、関東支部の発展に資することとができればと思っております。



112 名が出席した平成 20 年度の光潮同窓会関東支部総会
(東京・四谷の主婦会館で)



支部だより

逢坂の関址

関西支部支部長 守田 清 (昭和27年卒)

或る日曜日の午後、私は本棚の整理をしていると、見たことのない表紙が色刷りの二冊の薄い本が見つかった。一冊は源氏物語・大鏡評論と、もう一冊は評解小倉百人一首と題するどうやら子供が高校時代に使った国語の副読本らしい。私は其の中を何気なしにパラパラと捲ってみた。其の中に色刷りの二、三の挿絵が入っていた。其の中には京都御所、逢坂山関址、天橋立、宇治川等々其の中で、私の一番気を惹いた挿絵は逢坂山関址碑の一幅であった。常日頃からテレビの時代劇などによく見受けられる関所の場所であり、歴史上また、政治的にも戦略上も、かつては要衝の地であったものと思われる、私は非常に興味を持っていた。此を機会に一度訪ねてみたいと思っていた。

私は暫く探訪をしていないので此を機会に出かけてみることにした。ゆつくりした休日の朝食を済ませた後、妻と二人はテレビを見て少し寛いだ後、出かけることにした。

正午を少し廻った頃であつたらうか、出発の準備を終えると、戸締りを済ませて二人は最寄りのバス停へと向った。やわらかい日差しの快い休日であつた。

三條のバス停から大津に出るコースを案内所で尋ねる。京阪三条駅東西線で山科に出て、JR山科駅から大津駅に行くことを薦められた。案内の通りに何とか着くことが出来た。目的地は地図によると、大津駅の近くらしい。早速、改札口の駅員に尋ねてみたが要領を得ないので其の近くの蟬丸神社を訪ねることにした。

駅構内を南から北に通り返けて駅の正面から西に向かつて一六一号線に出て京都方面に向かって進んで行く、暫く坂道を登って行くと、右手に鳥居が見えてきた。蟬丸神社である。私達は京阪線の踏み切りを渡つ

て境内へ入って行く。入口の右手に蟬丸の歌碑がある。

これやこの

いくも帰るもわかれては

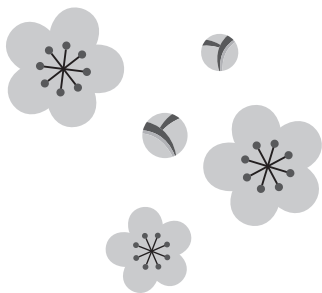
知るも知らずも逢坂の関

私達は境内を一周してまた一六一号線の大通りへと出て行つた。坂道を少し登った辺りで一人の地元の人に逢坂の関址の場所を尋ねてみたが分からない。その人は町内会長さん宅を指差しながら、「町内会長さんはよくご存知だからお聞きしてみては？」との事で訊いてみることにした。私達は玄関の扉を開けて中に入ると奥から私達を迎えてくれた。私達は側の応接に通され四方山話が始まった。

しばらくして逢坂の関址の場所を尋ねてみた。彼は親切に教えてくれた。

「此処からでは歩いて行くには遠いので、京阪線に乗って次の大谷駅で降りればすぐ分るから…」との事であつた。私達は言われる通り大谷駅を下りて山手に向つて街道に出る。直ぐ側に蟬丸神社の鳥居が見え

る。どうやら蟬丸神社は一ヶ所だけではないようだ。上、^{かみ}中、^{なか}下と三ヶ所あるようだ。そこから街道沿いにさらに登坂路を登って行くと一六一号線と一号線との交差点に出る。其の山手に例の石碑が見えて来る。其の側にはほこりを被った無人の交番がある。車だけがけたたましく音を立てて往来する。過ぎし昔を誰も気に留めるでもなく通り過ぎていく。まるで何も無かったように。私達は石碑を背に写真を数枚撮ってまた来た道を帰っていく。京阪三条駅に着くと夕日は既に西に傾き、私達は近くのそば屋に立ち寄る。帰宅の電車に乗る頃には辺りはすっかり夕日も沈んで仕舞った。



関西支部役員名簿

顧問	小川泰行 (S 22 年卒)
	光市在住
顧問	五嶋容子 (S 22 年卒)
支部長	守田 清 (S 27 年卒)
副支部長	貞永 晃 (S 27 年卒)
副支部長	小山 泉 (S 31 年卒)
幹事総務	海田 保 (S 24 年卒)
同	中山 肇 (S 30 年卒)
同	森本充則 (S 31 年卒)
同	小林一登 (S 43 年卒)
広報	肥田正之 (S 23 年卒)
会計	地家正男 (S 31 年卒)
事務局長	田村周治 (S 41 年卒)

☆関西支部事務所ご案内

〒530-0041

大阪市北区天満橋 3-2-13

大阪謄写館ビル 704 号室

有限会社タムラ不動産鑑定内

田村周治 (光高 S 30 年卒)

☎ おおさか 06-6881-0900

E-mail tamura@heartemail.ne.jp

☆光潮同窓会関西支部ホームページ

<http://koutyokkansai.hp.infoseek.co.jp/>

特集

私たちの誇りは「光龍一八会」

— 同窓会活性化に向けて —

作 間 源 治 (旧制光中
昭和23年卒)

私たちは、縁あって人生の最も多

感な青春時代を昭和十八年から昭和二十二年、二十三年までの四年乃至五年間、又は二十四年までの六年間(学制改革のため)、戦中、戦後の最も厳しい時期を「同じ釜の飯」を食べ、同じ体験を共有して来た。入学当初から三年までは、校訓「至誠一貫・堅忍不拔・質実剛健」を学業生活の拠り所とし、軍人勅諭や吉田松陰言行録の士規七則などの暗唱と暗写(書き取り)、光海軍工廠への学徒動員や予科練入隊など、毎日が張り詰めた生活の連続だった。ところが、昭和二十年八月、終戦。しばらくは墨を塗った教科書を使い、学用品などの不足と空腹に悩まされながら、授業を受け始めたことが今脳裏に生々しく蘇る。

私たちにとって、光高校は母校で

ある。いくら年を取っても何のわけかまりも無く、私たちを少年の日々に連れ戻し、安らぎと活力を与えてくれる不思議な存在である。以下、光高校卒業生としての私たちの誇りとアイデンティティ確立の拠り所となっている「一八会」の活動のあらましについて紹介し、同窓会活性化の一例になればと思っている。

◆同期会の名称と組織作り

私たちは、戦後の学制改革により卒業年次がそれぞれ異なるので、同期会の名称を浅江小学校(旧制光中学校)入りの口の跨線橋の名前と私たちの入学年次(昭和十八年)とから「光龍一八会」と命名。会長、副会長、会計及び地区世話人を決め、会の実施に当たっては、その都度幹事

と記録編集委員を定めることにしている。

◆定例「光龍一八会」

毎年一月十八日前後に光、下松及びその周辺に居住している者が順番に幹事となり、全国各地の同期生全員に呼びかけて、欠席者の現況やその年の物故者名、主要行事記録などを盛り込んだ要項を作成。会場に兼永芳也君達筆の「みんな元気でもまた逢おう光龍一八会」の横断幕を掲げて開催。その初回は昭和二十八年四月五日、大学等に進学した者が初めて就職した時であった。以後、四十七歳以降は毎年開催。その回を重ねること今年で三十一回を数えている。

◆周年記念「光龍一八会」

四十五歳を過ぎ、それぞれ生活

に落ち着きがでてきた頃から、十年毎の会を、光潮同窓会総会当日に持つこととし、卒業三十周年(四十八歳)、四十周年(五十八歳)、五十周年(六十八歳)、そして昨年六十周年(七十八歳)と四回開催してきた。そして、そのいずれの会でも、会員の情報や主要行事記録を盛った写真集を会員全員に配布してきたが、特に五十周年記念では「光龍一八会五十年の歩み」(百七十頁)を刊行することができたのは存外の喜びであった。なお、これら過去四回の周年記念「光龍一八会」は、すべて八月に開催された光潮同窓会総会当日





に出席したため、会場設営や経費その他すべてが効果的であったのは勿論、光潮同窓会総会を盛り上げるのに大いに役立ったと自負している。

◆その他主な活動

私たちは戦中、戦後の厳しい時代にあつたため、修学旅行がなかった。平成十七年十月二十二、二十三日（七十六歳）、「光龍一八会修学旅行要項」を作成し、北海道から鹿児島までの同期生とその家族が参加。関西支部同期生の献身的な世話で京都、琵琶湖周辺を中心に見事懸案の修学旅行を実施することができ、同窓の絆を一層強めることができた。

また、四十歳を過ぎて、ゴルフ同窓会、囲碁同好会、麻雀同好会を発足させたが、これらの同好会活動には、他の期の者の参加も得て、卒業生としてのお互いの絆を一層強め、情報交換の場としても大いに役立っている。

その他、旧光中跡地の桜保存会の設立（平成三年）を始め、平成四年には「一八会」が中心となって音頭を取り、スポーツ振興基金の設立に

寄与したことも思い出の一つである。

以上、「光龍一八会」の活動の一端を紹介したが、私たちが同期会としての活動を軌道に乗せたのは各人の生活が落ち着いて四十歳前後からであったが、これらはすべて、それ以前からの前会長福島文也君（光）、前副会長九内節雄（下松）、岡本昭夫（田布施）両君、事務局（故）原田泰洋（光）、浜野進両君（光）、会計の兼永芳也君（光）たちのすぐれた企画力と献身的な世話は勿論、地区世話人を始め、会員相互の並々ならぬ母校愛と光高校卒業生としての誇りに支えられてのことであること付記しておきたい。

なお、光高校卒業生としての誇りを高め、より強固なアイデンティティと母校愛を確立するには、母校の生徒の学業生活の充実や進路状況の改善、スポーツの振興等が欠かせないのは当然であるが、先ずは卒業生それぞれが同期会を盛り上げ、継続させるとともに、それを光潮同窓会の活性化に繋げ、母校に対してい

つでも物心両面の協力と支援ができる体制にしておくことも肝要であると思われる。母校のますますの発展を期待して止みません。



隗^{かい}より始めよ

同窓会の活性化に向け会報の改革に着手しました！

光潮同窓会広報部長 守田 義昭 (昭和42年卒)



掲載内容などについての協議を行いました。

今回の「第61号」においては、新たな気持ちで同窓会の役員に就任された役員の方々に、同窓会の改革と会報の改善に向けて、それぞれの同窓会に対する思いや願い、母校に対する期待などの一端について、原稿を書いていただくことにしました。

光高等学校「光潮同窓会」は、加藤正暢会長の高い識見と強いリーダーシップのもと、同窓会の活性化に向けた改革がスタートしています。

広報部においても、会長の方針に基づいて、会の機関紙「光潮会報」の改善に向け、内容の大幅な見直しを行いました。

そこで、広報部では、新しく選出された広報部役員により会報編集委員会を開催し、同窓会会報の改革に向けて、「会報61号」の編集方針や

広報部の役員からは、幅広い視点や独自の観点から、同窓会に関連する取り組みや同窓会の改善に向けた抱負や決意などが寄せられました。

また、今回は、「隗より始めよ」として、加藤会長自らが同窓会活性化への思いを込めて作成された表紙といたしました。

お寄せいただき、会報に厚みを増していただきました。心からお礼を申し上げます。

なお、今後、会報の発行は、会報の充実と同窓会の強化を図るため、今回号のような卒業式時の発行をやって、例年八月の総会時に発行する

会報のみの年一回といたします。

広報部では、会報の年一回の発行により、引き続き、会報の充実・改善に向けて努力いたしますので、会員の皆様には、今後ともご理解とご支援、ご協力をお願いいたします。



〃同窓会〃に期待すること

守田 信枝 (昭和32年卒)



が、たくさんいる。彼等は、西京・南工・柳井で、活躍している。

〃旅先で〃光〃と言えば、甲子園に出場したこと、ヨットが強いところ〃と言われる。

母校は、学芸・体育レベルから育まれる。

さて、同窓会の改革を試みておられるようだが、改革は、反省点を列挙して、叩き台をつくってから、指針を出す少しは未来像が見えてくるのでは？

以上、光高を愛し、誇りに思っている第三期生、昭和二十八年に卒業した、私の連れ合いの意見です。

政治や名誉に囚われず、母校を愛する意識の強い人で、同窓会の役員は、形成されることを望む。
母校の知名度の高揚に、物心ともに協力するには、スポーツの活動は欠かせない。
優秀な能力を持つ中学生をスカウトする。

校区内の中学生にも、秀れた人材

光潮同窓会の意義

酒井 隆行 (昭和35年卒)



「同窓会の活性化」を目指し、その一員として具体的に何をなすべきか？ 乏しい頭を捻っている昨今です。

こうした中で執筆依頼があり、戸惑いはありましたが原点とも言える「光潮同窓会の意義」について考えてみました。

光潮同窓会の大きな財産の一つは大先輩から新卒者までが一堂に会する機会が与えられていることです。具体的には
一光高卒業生のつながりの場である。

・若い人は先輩方の生きざまに接

し、自由に話を聞けるチャンスである。

・年配者は若者の生き方や考え方を共有・協働出来るチャンスである。

二行動を起こせば誰でも話し合える場である。

・肩書きのいらぬ仲間として、色々な意見交換や趣味などを遠慮なく話し合える。
などが挙げられます。

このような主旨のもと、先輩方のご努力で他校に類を見ない輝かしい実績と伝統を作り上げて頂きました。

若干マンネリ傾向が窺える今日、一工夫を加えてもっと生き生きとした愉快的会に行きたいと思う一人です。更なる発展に向け、皆様のご理解・ご協力とアイデアなどのご提供をお願い申し上げ、結びとさせていただきます。

光高等学校

木村 幸子 (昭和37年卒)



「陥れる」よみがなを付けなさい、高校入試の国語の問題で読めなかった。合格発表が恐くて見に行けなかった。友達が「番号があったよ。学校(中学)へ行こう」と知らせてくれた。何と嬉しかった事か。

あれから半世紀の歳月が流れました。校門には守衛室があり、登下校の挨拶、自宅からの忘れ物が届いたり、休日や放課後におやつ(末岡の豚マン・あんマン)を買いに出る時の目くばせ、あのお二人の笑顔が今も思い出されます。お元気にしていraftしやるでしょうか？

広大な土地に、平屋の校舎が整然と並び、授業の教科ごとに大移動。一年生の時には校門から下駄箱まではかなりの距離(時間)だったのを記憶しています。隣接の武田薬品から漂ってくる薬品の臭い、プールの水の流れも懐かしい思い出です。

現在は場所も校舎も変わり、懐かしさも校章と光高等学校という文字になりました。でも後輩達の活躍には、耳や目から取り入れ、声援を送っています。

良き時代に三年間を送り、良き師、良き友に恵まれ、仲間が集う会も年令を重ねながら続いております。

伝統ある光潮会のおかげで同級生を思い出し、光高を思い出す事が出来ます。この会が常に続きますように、お願い、お祈りしてます。

心のブレーキ

松尾 尚慈 (昭和39年卒)



最近、新聞の三面を見るのが悲しくなりました。そこには毎日のように、今まで考えられなかったような恐しい記事が目飛び込んできます。

親が子を殺し、子が親を殺すという悲惨な記事を目にしない日の方が少ないくらいです。

テレビを見ると、親に殺されたあどけない幼児の姿がくり返し目に入ってきます。私はその幼児の無邪気に遊ぶ姿を正視できなくてテレビのスイッチをあわてて切ることがあります。

どうして、人間はこんなに悲惨なことをするようになってしまったのでしょうか。昔にも親が子を殺し、子が親を殺す事件がなかったわけではありません。しかし、そこには、

やむにやまれぬ問題があり、なんとなくそういう結果にならざるを得なかった理由に同情できるものがありました。

ところが、今起っている悲しい出来事には同情できる要素など皆無です。

殺害を友人(十五)に依頼した長男(十六)が弁護士にした話として「どうしてこういうことをしてしまったんだろう」とか、共犯の少年は「やめろよ」などと止めなかったとし誰かに相談もしなかったと話し、その様子から弁護士は「(犯行の動機)は金以外のものが大きいと見ている。ただ(なぜ犯行に及んだか)少年自身も理解できていないようだった」と語っています。

戦後、特に自分を大切にすることは、自分の心を大切にすることだという風潮の強い中で「自分の心のブレーキ」を失ったと共に他をおもいやるというやさしさを失った人間が多くなったことも、このように、事件を起した当事者自身が理解できない事件が増えている一因ではないかと私は感じています。



これからの光高校(光高校生)に期待すること

田中 謙史 (昭和61年卒)

急速な少子化の進展を背景に、クラブ活動の種類も様変わりをしている。光高校案内(ホームページ)にも『文武両道』をモットーとあるが、私が在籍していた頃には、日本のお家芸であった柔道部も存在した。

しかし、現在では諸般の事情から部は休部状態(約五年前)にあり、OB会のみが、柔道部復活の日を信じ、バックアップ体制を継続している。在校時代に、思いつきり部活動(勉学は些か疑問であるが...)ができたのは、恩師をはじめ諸先輩方から受けた数限りない無償の愛があったからこそできたこと。当然その背景には、多額の活動費も存在したことになる。

その後、卒業してからの十年間は後輩に胸を貸し、それができなくなれば、僅かではあるがOB会費で恩

返しの真似事を行った。

このようなことは、あえて強制することではないが、『光高で学べてよかった』という自然な感謝の気持ちの現れだったと思う。

在校生の皆さんは、既に明確な目標をお持ちでしょうが、それに向け全身全霊を傾けこれからも邁進して戴きたい。そして、よりたくさんの感動を後輩に繋げられるよう、いつまでも輝く誇り高き文武両道の光高校を目指されることを祈念します。



ふるさと「光」を感じたとき

芳岡 統 (昭和62年卒)



卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

私が卒業してからは、もう22年が経ったことになりました。この間の私は、大学・大学院の7年間（あれ1年多いぞ？）を大分市で、就職で配属された堺市で4年間過ごした後に転職し、ふるさと光市にUターンし

ました。一大決心の転職からも、もう11年が経過しました。

Uターンしたといっても、盆暮れ等の帰省で少しずつ変化する光市の様子を見ていたので、虹ヶ丘―森ヶ峠線開通に度肝を抜かれたこと以外にはそれほど驚きや懐かしさは感じることなかったのですが、ただ、ふるさとに帰ることができた安堵感や安心感に守られて、異業種に転職した不安も小さく、新しい生活を大過なく始めることができた気がしています。

それから数年して、娘が、私の卒業した小学校に入学することとなりました。日頃から校門前を通ることはあっても校内にまで入る機会はありませんでしたが、入学式や参観日で校舎内に入った瞬間に、「ああ、こんなのあった。あった。」「ここ

で立たされた。」等々、その頃の楽しかったこと、嫌だったことなどの様々な思い出が次々に甦ってききました。懐かしい思い出の時間と、大人になった今の自分の時間が重なって、なんともいえない不思議でかつ心地よい気持ちになりました。このときに、ふるさとに帰った実感を強く感じました。

この度、光潮同窓会のお手伝いをさせていただくことになり、久しぶりに光高校を訪ね、校舎内に入る機会を得ました。あの時と同じように

変わらない佇まいの懐かしさと偉大な諸先輩方や多くの可能性を秘めた後輩の皆さんがこの学び舎から新しい生活へ踏み出して行った伝統の重さを改めて感じているところです。

この春卒業された皆様にとって、今はまだピンと来ないのは無理もありますが、そのうち一人でも多くの方が、いつの日か私と同じような境遇、気持ちを実感できることを楽しみにしています。ふるさと「光」で「光潮同窓会」でお待ちしています。



近くて遠い存在

森戸 芳史 (昭和63年卒)



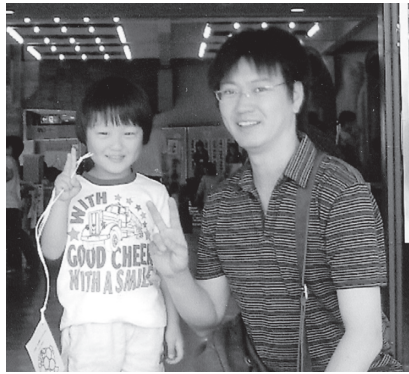
光高校を昭和63年に卒業し、20年近くが経とうとしています。地域に住み、活動している現在、母校に関して巷で聞こえてくる声に良い声はあまり聞きません。「いったい何が母校に起きているのだろうか。」「近くにありながら何故か遠い存在」ということが私の正直な感想です。一昨年、光丘高校が公開授業を開催するというところで行ってみると、懇切丁寧にご案内して頂きました。そして光市の経済人新年互礼会まで校長先生が参加をされているのを見て、

開かれた学校にしようという熱意を感じました。卒業式にも一般参加でのご案内を頂き、応援したいというような気持ちにさせて頂きました。卒業生でもなく保護者でもない私を大切にしてくれるのであれば生徒も大切に扱ってくれるのではないのか。だったら子供をこの高校に行かせたい、そう思いました。ひるがえって光高校を見た時、そこまでされたことがあったのだろうかと思います。今、光高校に必要なのはそういった開かれた学校づくりではないでしょうか。そのつなぎ役は同窓会であり、一人一人を大切に扱うように、当たり前のことをするだけでファンが増えるような気がします。



「母校」の繁栄を願って

佐々木 孝高 (平成3年卒)



かしい栄光の話や、校風、お決まりの合言葉などを誇らしげに語りまします。それは、在校生の間で脈々と受け継がれてきたものでもあります。が、「母校愛」の表現として、偉大なる先輩方から世代を超えて語り継がれてきたものでもあります。「母校」とは、多くの卒業生と在校生が時を越えて同じ気持ちやこだわりを共有できる存在でもあるように思います。

ところで、私はこのたび光潮同窓会の役員として、広報紙の企画を務めることとなりました。魅力ある広報をつくるためには、「母校愛」を育むことのできる内容とするべきではないかと考えました。

在校生の大いなる活躍のためにも、広報紙を通じて学校の歴史の紹介をはじめ、現在のスクールライフなど多くの情報を伝え、会員の包み込むような愛情によって「母校」を支え、さらに繁栄させて行かなくてはならないと思います。

光高校を卒業された皆さんにとって、「母校」とはどのようなものでしょうか。楽しかったこと、つらかったこと、出会いや別れ、こうした懐かしい出来事とともにかけがえのない思い出を集約したものが「母校」ではないでしょうか。

しかしながら、学校の伝統や歴史、受け継がれてきた精神も、「母校」を認識させてくれる一つの要素だと思えます。

誰もが自分の母校を話すとき、輝

「光潮同窓会に寄せて」

北川 宜孝 (平成8年卒)



あるのではないかと思います。

では、今後この同窓会をどのような形にするのが私を含め、この度役員になった者の使命であると考えます。これまでどおり、総会の実施と会報の発行という形をさらに充実させることが良いのかもしれない。それとも、いざれ卒業しても同窓会生となる在校生のことを考えるなら、進学、就職などの体験談を聞くための場を設けることも一つの手段なのかもしれません。

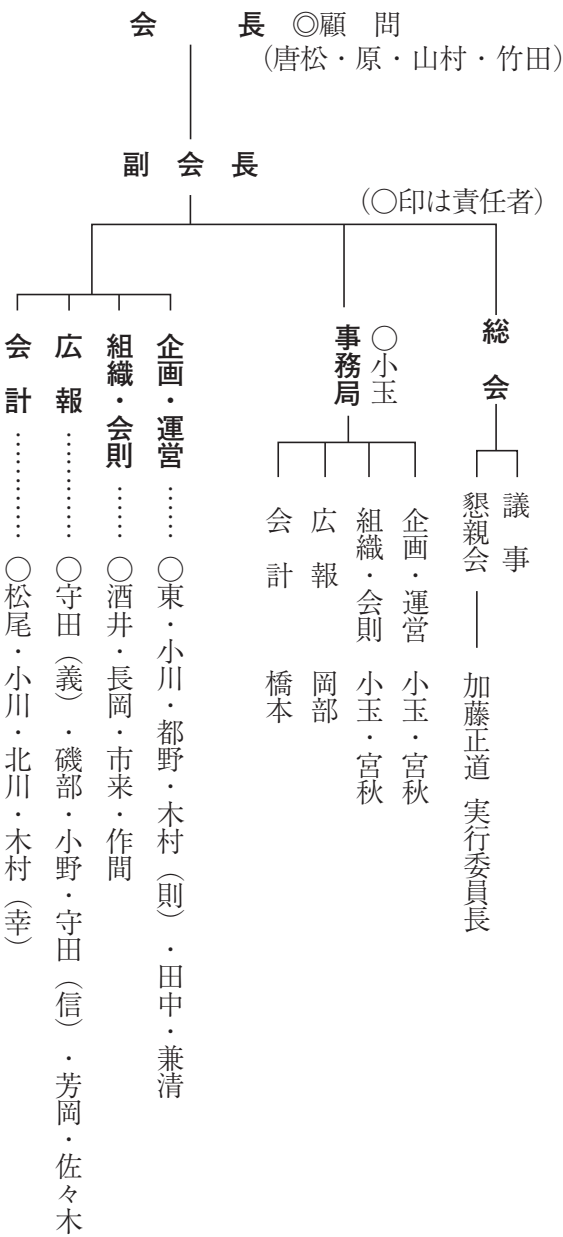
他にも、多くの人が知恵を出せば良いアイデアは出るでしょう。時には役員だけでは超えられない難問にも遭遇するかもしれません。その時は、会員みなさん、是非ともお力をお貸しください。みなさんも私たちと同じ「光潮同窓会生」なのですから。

光高校を卒業して10余年。この度、光潮同窓会の役員の任を仰せつかりました北川と申します。役員の仕事をお受けするにあたり、これまでの同窓会との関わりを振り返ってみると、同窓会（総会）に出席したのは卒業翌年の1回のみであり、同窓会に対していかに今まで無関心であったかを改めて気づかされました。どの組織でもそうですが、そこに所属する人がそれぞれに意識を持って参加しなければ、組織は形骸化し、存続意義すらなくなります。光潮同窓会も、残念ながらこのような状況に

平成20・21年度光潮同窓会役員名簿

職 務	氏 名	卒	担 当
顧 門	唐松 良生		
	竹田 充志		
	原 栄次		
	山村 繁典		
会 長	加藤 正暢	30	
副 会 長	長岡 幹夫	38	組織・会則
	小川 善昭	45	企画・運営 会計
	磯部登志恵	53	広 報
幹 事	作間 源治	23	組織・会則
	守田 信枝	32	広 報
	市来健之助	32	組織・会則
	酒井 隆行	35	○組織・会則
	木村 幸子	37	会 計
	松尾 尚慈	39	○会 計
	東 日出夫	42	○企画・運営
	守田 義昭	42	○広 報
	兼清 照久	45	企画・運営
	木村 則夫	49	企画・運営
	都野 悦弘	53	企画・運営
	田中 謙史	61	企画・運営
	芳岡 統	62	広 報
	小野美智恵	63	広 報
	佐々木孝高	H3	広 報
	北川 宣孝	H8	会 計
事 務 局	小玉 昭文	57	
	宮秋 孝史	57	
	岡部 彰彦	60	
	橋本健太郎	H4	
監 査	原田 良作	25	
	泉屋 孝	35	

平成20年度同窓会運営組織図





編集後記

卒業される皆さん、誠におめでとうございます。そして、「光潮同窓会」への入会を歓迎いたします。

今月号は、同窓会の活性化と機関紙である会報の改善を行うため、同窓会役員の皆さんが、同窓会への期待や思いなどについて、寄稿していただきました。

また、恒例の関東支部からは、昨年会長に就任された中原靖生先輩（昭和34年卒、前／カンロ株式会社社長）から寄稿いただき、関西支部からは、守田清先輩（昭和27年卒）から寄稿していただきました。心からお礼を申し上げます。

発行に当たって、校務多用の中、同窓会事務局（広報担当）の岡部彰彦先生（昭和60年卒）には、原稿依頼から編集、校正に至るまで、広報委員会の取りまとめとして、力を発揮していただきました。厚く感謝いたします。

本年、卒業される皆さん、本年八月中旬の日曜日に開催される同窓会の総会（懇親会）には、是非出席してください。多くの同級生に出会うことができますよ。皆さんを待っています。

十二ページに記しましたように、次回の発行は、夏の総会の開催に合わせて発行します。現在、広報部では、どのような内容にするか話し合っています。

これから、同窓生の諸氏に協力や相談をさせていただきます。その節はよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、卒業生、在校生並びに会員の皆さんのご活躍とご健勝を願って、編集後記といたします。

（同窓会広報部長 昭和42年卒、守田義昭）



現在の光高等学校の校章（上段）は、新制高等学校発足準備にあたり、昭和二十二年に光中学校及び併設中学校の全校生徒からデザインを募集し、当時併設中学校三年だった岡田一夫氏の作品を採用したものです。

発行所 山口県立光高等学校光潮同窓会
山口県光市光井 6-10-1
TEL 0833-72-0340 (光高校)

印刷所 中村印刷(株)